オープンカレッジ

相手を知ることが差別解消の第一歩

刷り込みからの脱却

愛知淑徳大学
ビジネス学部助教
菅野　淑

かんの・しゅく　文化人類学、アフリカ地域研究。名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後満期退学。1982年生まれ。

西アフリカ・セネガル共和国の「伝統的」な踊りとそれを取り巻く人々を、私は15年以上研究している。初対面の相手に「アフリカの研究をしている」と伝えると、たいてい奇異な目で見られる。さらに「女一人で現地へ調査に行っています」と言うものなら、ますます理解できないという表情をされてしまう。

アフリカは、いまだ日本人にとって、野生の王国、内戦、虐殺、飢餓、病気などといったメディアで取り上げられているイメージが先行しがちである。そもそもアフリカは54の国（西サハラを入れると55カ国）があり、民族や言語、文化などすべてが多様にも関わらず、一緒くたに扱われることが多い。アフリカ人と聞けば、いまだ「遅れた可哀想な人たち」であり、援助してあげる対象だというの思い込みが根強い。日本にとってアフリカ地域は物理的な距離のみならず、心理的にも「遠い」ところなのである。

刷り込まれたイメージは、そう簡単に消えるものではない。だが、実際にその地域に行く、またはその国の人たちと触れ合うことで、解消されることもある。かくいう私も、調査対象をアフリカの踊りにしたのは、無意識に刷り込まれていたイメージの影響だ。

「黒人はリズム感がよく、格好いい踊りをする」、「アフリカ人は誰もが皆踊る」。それがきっかけだった。しかし、実際に現地へ行くようになり気づいた。彼らは、踊らない。ダンスパーティの場に来ても、その場を楽しむが、積極的に踊らない人が大半だ。また、彼らの踊りを見ていても、リズム感がない人はない。それは私にとって衝撃の事実であり、「百聞は一見に如かず」を実感した出来事のひとつである。

昨今、アメリカで起きた警官による黒人殺害を発端にしたデモや暴動が世界各地で広がっている。紙面の都合上、詳細は割愛するが、黒人差別は根深く複雑な問題である。日本国内においても、黒人に対する差別は存在する。ほぼ均一化されていることが「良い」とされる日本において、異質に見える存在は排除されがちである。

コロナ禍の影響により変化が生じる可能性は否めないが、今後も日本において外国人労働者は増加し、より身近に外国人が存在するようになるだろう。また、外国人と日本人配偶者の間に生まれた子どもも増えていく。彼らは皆、同じ「人」であり、感情があり、性格も人それぞれだ。「〇〇人だから」、「こういう見た目だから」と一把一絡げにすることはできない。無意識に刷り込まれてきたイメージや思い込みで彼らを判断し、決めつけることからまずは脱却すべきである。

差別は日常的に、身近に存在する。それは、黒人やその他の外国人に限ったことではない。知らない、わからないものは誰でも怖い。だから、メディアなどを通じて得る情報を鵜呑みにしてしまう。しかし、それらに振り回されず、自分自身のまなざしで相手を見つめ、知ることが差別や偏見の解消に向けた第一歩である。